

結章 調査結果の総括

本調査により、明確になった事実を総括すると、つぎのようになる。

1. 総高訓における中退の全般的な動向

1-1 訓練初期（1年次4月から10月）の中退率は昭和45年度—7.5%、昭和47年度—7.1%であり、すくなくともこの2年間では年次的な中退率の大きな変動はない。

1-2 2ヶ年間の訓練課程における中退率は約16%である。

1-3 中卒訓練生の中退率が極くわずかではあるが高卒訓練生の中退率より高い。
ただし、訓練初期には高卒訓練生の中退率（10.9%）であり、中卒訓練生の中退率（8.7%）より若干高い。

1-4 訓練校別の中退率はかなりの相異がある。昭和45年度訓練初期についてみれば、最も中退率の高い総高訓は30.1%であり、逆に中退率の最も低い総高訓は0%である。

1-5 訓練職種別の中退率はかなり異なり、比較的中退率の高い科は自動車整備科、板金科、溶接科である。

逆に、中退率が低い職種科は木工科である。

1-6 月別の中退者数をみると、2年間の課程で、入校直後の4月、1年次夏休み後の9月、1年修了時の3月に中退者の頻度が高くなっている。

また、中退者総数の約50%が1年次の9月頃までに、あとの約25%が1年次修了までに中退している傾向がみられる。

1-7 中退時に提出される書類<事由>欄の分析からは中退内容はつかみにくく、約半数は家事都合、一身上の都合としており、中退内容把握に方法上の工夫が必要とされる。

1-8 中卒訓練生と高卒訓練生との中退理由を概観的に比較すると、若干ではあるが差異が認められる。

例えば、高卒訓練生は勧告退校がほとんどないこと、家庭環境による中退でも、家庭経済の貧困による中退はなく、家業に従事のための中退が多いなどの特徴傾向がみられる。

2. 中退理由と中退経過

2-1 訓練生の中退理由はおおよそ、第I群から第V群に区分できる。

つまり、第I群は身体的な問題が主たる理由の群、第II群は個性的な問題が前面にだされている中退群、第III群は家庭環境が主たる理由の群、第IV群は他の教育機関への進路変更が理由の群、第V群はいわゆる“社会的不適応”による中退群である。

2-2 中退理由群ごとの人数比率は次のごとくである。（訓練中、後期の分析）

第Ⅰ群が9.7%、第Ⅱ群が18.7%、第Ⅲ群が18.7%、第Ⅳ群が4.9%、第Ⅴ群が25.2%である。

そして、中退理由がわかりにくいものを第Ⅵ群とすれば、第Ⅵ群は22.8%である。

2-3 中退理由は表現としては一つになっており、一応の分類はできるが、多くの事例において、いくつかの理由が複合されて中退という行動に結びついている。

2-4 中退行動は個人的要因と社会的要因との作用関係から生じるもので、中退理由をいずれが一方に規定することは解釈上むずかしい。

2-5 訓練初期には第Ⅴ群、社会的不適応による中退は少ない。

ゆえに、訓練初期には第Ⅰ群から第Ⅳ群までの中退に留意する必要がある。

2-6 中退経過はその理由により様々であるが、おおよそ次のように分けられる。

- ㊶ 原因不明で欠席が多くなって中退する場合
- ㊷ 原因不明で突如として中退する場合
- ㊸ ある原因があって、徐々に欠席があり中退する場合
- ㊹ ある原因があって、突如として中退する場合

2-7 中退経過として欠席が一つの前兆になる場合が多い。

その欠席が多くなる型は次のごとくである。

- ㊺ 中退を訓練生自身が決意しながら、屈出をしないために自然に欠席が多くなった場合。
- ㊻ 中退を決意しないが、欠席がちになり、登校するのが気まづくなっている場合。
- ㊼ 欠席がしばしばあって、心配しているうちに連続して無断欠席が生ずる場合。
- ㊽ 訓練初期から欠席が多くて、再三の注意にもかかわらず欠席があらたまらない場合。

3. 中退訓練生の personal traits

3-1 職業興味検査、性格検査、知能検査、職業適性検査を組合せて、personal traits を検査したが、その結果から訓練生の中退を予測することは、妥当性検討が不充分なので、今のところ現状の総校訓においてはできない。

3-2 しいていえば、中退訓練生と修了訓練生群との間には各personal traits において、次のような差異がうかがわれる。

- ㊾ 職業興味「機械的領域」で、中退訓練生群は修了訓練生群より低い値を示すものが多い。
- ㊿ 中退訓練生群にはB型性格の者が若干多い。つまり、情緒不安定、社会的不適応、活動的、外向的な人でパーソナリティの不均衡が外にあらわれる人で反社会的な行動がしやすいという型に中退者がやや多いといえる。

㊦ 知能偏差値が高い者より低い者の方が中退する比率がやや大きい。

3-3 personal traits 上ではほとんど同じ問題点をもっているも、中退する訓練生と修了する訓練生が存在する

4. 中退訓練生のプロフィール

4-1 中退する可能性は、個人的因子のみできまるのではなく、経済的能力、近親者の状態、教育制度の状況、訓練校の状況など個人に対する社会的な影響との作用関係によって規定される。

4-2 中退訓練生の中退後の進路は72%まで担任指導員が知っている。

4-3 進路が認知されている中退訓練生89名のうち、41名の46%が技能系職種に進路を選択している。

4-4 中退理由群ごとの中退後の進路の認知度は第I群<身体>58.3%、第II群<個性>86.9%、第III群<家庭>95.6%、第IV群<他教育機関>100.0%第V群<社会的不適応>64.2%である。

第V群のいわゆる社会的不適応による中退群は中退後の進路がつかみにくく、しかも中退時の指導が必要な場合が多いと思われるので、今後の検討が必要である。

むすび

この調査により、総高訓における中退訓練生の行動様相はいくつかの課題を残しながらも、かなり明確になった。

特に注目したいのは、中退訓練生群は個性的要因において若干の特徴傾向を示しながらも、修了訓練生群の個性的要因と比較して有意な差異は認められなかったことである。

この事実から、現状の総高訓における中退現象は平均的にいえば個性的要因以外の要因、つまり訓練校自体や家庭など環境的要因に基づくものが多いといえよう。ゆえに、従来のごとく、中退訓練生をすべて個性的に問題のある訓練生として対処するのではなく、中退の本質的な理由から訓練生の理解を深めることがのぞまれる。

しかし、中退訓練生を個別にみれば、個性的要因による中退訓練生が約2割いることも確かである。この訓練生に対しては前述のごとき「訓練生個性プロフィール」を活用するなどして、興味の欠如、知能水準の度合など個性要因における問題点を訓練初期に発見し、適切な指導をすることものぞまれる。

さらに、今後の問題としては、中退訓練生に対する具体的な対処の仕方をみいだすために、社会的不適応の根本的背景を把握するなど、中退訓練生との直接面接を通じて、深層心理を理解する臨床的な研究が必要である。